

# 体育授業における言語活動の機能に関する研究 —A 中学校での事例をもとに—

余語 幹夫

## A study on function of the language activities in the physical education class —A case at a junior high school—

Mikio YOGO

### 1. 問題と目的

中央教育審議会答申により「言語活動の充実」が求められるようになり、その考え方は平成20年小学校学習指導要領体育編に反映されている。その背景には、3つの要因がある。1つ目は社会の「変化に対応する能力や資質が一層求められている」ため、2つ目は「国内外の学力調査の結果などから、我が国の子どもたちには思考力・判断力・表現力等に課題がみられる」ため、3つ目は「教育基本法、学校教育法が改正され、知・徳・体のバランスを重視」するとともに、「学校教育においてはこれらを調和的に育むことが必要である旨が法律上規定」されたためである<sup>1)</sup>。これらのことを背景に、体育科においても「言語活動の充実」が求められている。

昨今では、言語活動を充実させるために、作戦タイムや学習カードの記述を形式的にでも導入している授業がある。そのような実践に対し、「言語活動の量的な充実」や、「学習カードの記述量で評価すると国語の文章力の評価に転じる」といった批判がある<sup>2)</sup>。たしかに、体育授業でよく見られる光景の一つに、話し合いタイムでは作戦やコツなど様々なことを話し合っており、言語活動の時間は増えているが、その後の運動では全く作戦やコツが活かされず、言語活動が機能しているとはいえないといった授業がある。体育科において、そのような実践は、①言語活動に過剰な時間を費やして運動量を減少させていること、②運動感覚を言葉で表現することは難しいこと、③言語活動が形式的に導入されていることの3つの問題をもたらす、教科の目標を損ねているものと考

える。

そこで、本研究では、研究Ⅰの事例・論考の調査と研究Ⅱの事例的研究の2部構成とする。

研究Ⅰでは、体育における言語活動の充実を踏まえた事例と言語活動に関する種々の見解に3つの問題点が含まれることを指摘し、言語活動にはどのような役割があるのかを明らかにする。これを研究Ⅰの目的とする。なお、体育学習の成果は評価の観点を反映している。それは、小学校・中学校・高等学校のすべてに共通するものとして「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能」の3観点がある。したがって、この観点の実現をもって体育学習の成果と考え、判断する。

以上を踏まえ、研究Ⅱとして授業観察を行う。一般に上記の3観点のうち「技能」が体育固有の観点である。また、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」の2観点は学習者の情意的・内的な状況を表すので、潜在的な性質を持っている。そこで、実際の体育授業の観察において、「技能」に関する言語活動の場面について検討し、言語活動にはどのような機能があるのかを事例をもとに明らかにする。これを研究Ⅱの目的とする。

### <研究Ⅰ>

#### 2. 方法

##### 2-1. 対象とする資料

対象とする事例は、雑誌「体育科教育」の中で「言語活動」に関わる事例と体育科における言語活動に関わる書籍の事例、さらに、言語活動に関する研究報告等の事例とした。これに加えて、「言語活動の充実」について、いくつかの論考がある。それも事例と合わせて検討する。

## 2-2. 分析方法

収集した事例・論考から「言語活動の概要」をまとめる。そして、言語活動が機能することは学習の成果へと結びつき、この学習の成果は一般に評価の観点でもある。この評価の観点は①関心・意欲・態度、②思考・判断、③技能に分類され、この3つの視点から、言及内容・事例を分類し、それぞれの特徴をあげ、これを批判的に検討する。

## 3. 結果と考察

### 3-1. 言語活動における機能の分類

収集した言語活動に関する事例・論考は52編である。それぞれの事例・論考を見ると、全52編のうち、重複しているものも含めて、言語活動の機能として、「関心・意欲・態度」に関するものが11編、「思考・判断」に関するものが47編、「技能」に関するものが41編である。

#### 3-1-1. 関心・意欲・態度に関する機能

関心・意欲・態度に対して機能する言語活動には意欲を高める機能、学習者の気持ちを高揚させ良い雰囲気を作り出す機能、言語化によって目標が定まる機能があると考えられた。一方、言語活動が意欲を低下させ、言語活動が無駄な時間となる場面もある。

#### 3-1-2. 思考・判断に関する機能

思考・判断に関する機能する言語活動には課題を検討する機能、考えたことを焦点化する機能、思考を生成する機能、フィードバックする話題を構成する機能があると考えられた。一方、言語活動が課題を解決しておらず形式的導入となっている場面もある。

#### 3-1-3. 技能に関する機能

技能に関する機能する言語活動には運動技能を向上・共有する機能、学習目的を追求する機能があると考えられた。一方、一般的に思考は言語によって行われるが、運動には自動化され、言語的な過程によらない場面がある。また、運動のイメージを限定し、自由な発想を抑制してしまうことも考えられる。さらに、運動感覚を言語化することは困難な場合がある。

## 4. まとめ

研究Ⅰから、「言語活動の充実」は上記の3つの問題をもたらし、教科の目標を損ねる可能性を提起した。

その結果、関心・意欲・態度に関する機能における言語活動には意欲を高める機能、良い雰囲気を作り出す機能、目標が定まる機能があることが考えられた。思考・判断に関する機能における言語活動には課題を検討する機能、考えたことを焦点化する機能、思考を生成する機能、フィードバックする話題を構成する機能があることが考えられた。技能に関する機能における言語活動には運動技能を向上・共有する機能、学習目的を追求する機能があることが考えられた。しかし、授業に言語活動を取り入れることで、運動量が減少してしまうこと、運動感覚を言葉で表現することは難しいこと、形式的に導入されてしまうことといった可能性が示唆された。

そこで、関心・意欲・態度、思考・判断、技能に対して機能することが、体育の目標を損なわず、体育授業に機能する言語活動といえると考えた。

## <研究Ⅱ>

### 5. 方法

#### 5-1. 概要

研究Ⅱでは、A中学校の教諭が実践した全学年の体育授業を対象とした。観察期間は平成27年10月19日から平成27年11月30日である。授業の単元は「バスケットボール」、「ハードル走」、「ソフトボール」である。観察対象は、A中学校の第1学年の「バスケットボール」、第2学年の「ハードル走」と「バスケットボール」、第3学年の「ソフトボール」である。授業時数は全52授業である。

#### 5-2. 分析方法

研究Ⅱでは、子どもが言語活動を行っている場面を取り上げ、その言語活動の場面を記述する。観察者は言語活動の場面には介入せず、参与観察を行う。そして、言語活動にはどのような機能があるのかを、観察した事例の中で記述し、質的に分析した。なお、観察記述は、授業中に子どもが話し合っている場面や言葉を発した時に行うこと

とした。しかし、1授業で40人程度の全ての言語活動を観察することは、本研究の限界を超えている。そこで、筆者が判断する限り、授業の目標に照らして、中心的な活動場面に注目し、参与観察を行うこととした。

### 5-3. 分析の観点

言語活動の場面から発話者と受け手を特定する。そして、その発話の前後でどのような行動が見られたか、また、その場面は授業の中で、何を学習している状況かという文脈も加味して言語の機能を分析する。

### 5-4. 非言語を用いた言語活動

中央教育審議会答申により、「言語活動の充実」の説明では「合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体表現などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする（音楽、体育等）」と述べられている<sup>2)</sup>。このように言語の役割が伝え合ったり、共感したりすることから、ジェスチャーやアイコンタクトなどの非言語においても「伝え合う」という観点から、言語活動であると捉えられる。

したがって、研究Ⅱにおける言語活動とは言語の有無にかかわらず、他者に何かを伝えたり、他者から受け取ったりすることを指すものとする。

## 6. 結果と考察

収集した言語活動における事例は全101事例である。本研究では学習している状況の文脈であることを加味し、技能に機能した事例を収集した。そのため、一般的な言語（挨拶や激励など）を除外している。ところで、技能に関する言語は、それを発揮する状況において指示する声が出ることがしばしばある。そして、技能を発揮した後、それを評価する声が出ることがある。さらに、対象とした授業全てに、課題を確認する活動が計画的に含まれている。

以上のことから、それぞれの事例を見てみると、言語活動が行われる状況に関して「指示をする状況」、「課題確認をする状況」、「評価をする状況」の3つに分類した。その結果、「指示をする状況」が56事例、「課題確認をする状況」が33事例、「評価をする状況」が12事例である。

## 6-1. 体育授業における言語活動の場面の分析

### 6-1-1. 指示をする状況における分析

#### 【事例1】1年バスケットボール

5対5のゲーム中、シュートが外れ、ディフェンスがリバウンドを取ってターン・オーバーをした。A(バスケット部の生徒)がゴールに走り、ボール保持者は速攻攻撃をしようとして、Aにパスを出した。B(ゲームを見ている生徒)がディフェンスの生徒に対して、「追いつけ、追いつけ。」と叫んだ。すると、C(ディフェンス)は全力で走り、Aに追いついた。Aはレイアップシュートを打ったが、外れてディフェンスがボールを取った。

バスケット部のAはノーマークでレイアップシュートを外すことは極めて少なかった。この場面でも、速攻で抜け出した時はノーマークであったが、BはAを止めてほしかった思いから、Cを奮い立たせようとしたのだと考えられる。つまり、Bの発言には鼓舞の機能があると推察される。また、その状況で、Aがレイアップシュートを外したのは、Bの指示によって、Cが追いついたことにより、Aにプレッシャーをかけたからだと考えられる。したがって、Bの言語活動はCの技能に機能していたと思われる。

### 6-1-2. 課題確認をする状況における分析

#### 【事例2】3年ソフトボール

チーム内での対戦練習中、ランナーが1塁にいる場面で、A(攻撃チームの生徒)がB(打者)に「どっち空いてる？」と尋ねた。Bは守備を見渡して、セカンド方向に打つかのように構えを向けた。セカンド付近を守っている生徒はいなかった。打球はセカンド方向に転がり、センターを守っていた生徒が打球を取りに走った。その間に、ランナーは進塁し、Bも出塁した。

この場面でのAの発言は、守備位置を見て、どの方向に打球を飛ばすべきかを考えるように誘導したものであると考えられる。つまり、Aの発言には思考促進の機能があると推察される。その結果、Bはセカンド方向に守備が少ないことに気付く、セカンド方向に向かって打ったことで、ラン

ナーも打者もアウトにならなかったのだと考えられる。したがって、Aの言語活動はBの技能に機能していたと思われる。

### 6-1-3. 評価をする状況における分析

#### 【事例3】2年ハードル走

授業の練習中、Aがハードル走を行っているのと同じグループの生徒が見ていた。Aの試行後、B（Aと同じグループの生徒）が「走っててどうだった？」とAに尋ねた。すると、Aは「マリオになった。」と答えた。Bは踏み切った場所を見ながら、「遠かったんだと思うけど。」と言った。その後、AとBはそれぞれがハードル走を行い、AとBの踏み切り位置を比べて、BはAよりも遠くから踏み切っていたことを確認した。Aは「近すぎるとマリオになっちゃうから。」と言いながら、踏み切り位置を以前より遠くさせるために地面に足で線を引いた。練習後の競走では、高さに変化はなかったが、踏み切り位置がハードルから遠くなっていた。

Aの発言から、Aが試行した後は高さに意識が向いていたが、Bの発言によって、踏み切り位置に意識が向いたと考えられる。つまり、Bの発言には焦点化の機能があると推察される。また、Aは踏み切り位置に意識が向くによって、その後の競走での踏み切り位置に変化が見られたのだと考えられる。したがって、Bの言語活動はAの技能に機能していたと思われる。

## 7. まとめ

言語活動に関する事例から、言語活動を行う状況を、「指示をする状況」、「課題確認をする状況」、「評価をする状況」の3つに分類した。

そこから、指示をする状況における言語活動には、「想起」、「鼓舞」、「焦点化」、「合図」、「簡略化」、「騙し」、「安全のための予告」、「言語活動促進」の8個の機能が考えられた。課題確認をする状況における言語活動には、「思考促進」、「簡略化」、「焦点化」、「再生」、「振り返り」の5個の機能が考えられた。評価をする状況における言語活動には、「焦点化」、「振り返り」、「鼓舞」の3個の機能が考えられた。

## 8. 本研究のまとめ

言語活動は体育授業において、上記の3つの問題をもたらし、教科の目標を損ねているものと考えられた。

そこで、本研究では、研究Ⅰで事例と論考の調査を行い、研究Ⅱで事例的研究を行った。

研究Ⅰでは、体育における言語活動の充実に関する事例と言語活動に関する種々の見解に3つの問題点が含まれていることを指摘した。さらに、それらが体育学習の成果を損ねる可能性に「関心・意欲・態度」に対しては言語活動に過剰な時間を費やして運動量を減少させていること、「思考・判断」に対しては言語活動が形式的に導入されていること、「技能」に対しては運動感覚を言葉で表現することは難しいという可能性が示唆された。

また、研究Ⅱでは、実際の体育授業の観察において、「技能」に関する言語活動の場面について検討し、言語活動にはどのような機能があるのかを事例をもとに明らかにすることができた。

その中で、指示をする状況には想起、鼓舞、焦点化、合図、簡略化、騙し、安全のための予告、言語活動促進の8つの機能が考えられた。課題確認をする状況には思考促進、簡略化、焦点化、再生、振り返りの5つの機能が考えられた。評価をする状況には焦点化、振り返り、鼓舞の3つの機能が考えられた。

本研究を通して、事例と論考から言語活動の問題点を指摘し、実際の体育授業の場面における事例で分析を行った。得られた結果や考察は全運動領域や全校種に応じたものではないが、言語活動を質的に分析する観点は教育場面での言語活動の充実に役立つと考えられる。なぜなら、言語活動を取り入れる意図を明確にすることができるからである。本研究が言語活動の充実の在り方を発展させる一助となることを願う。

## 9. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：学習指導要領における言語活動の充実、文部科学省ホームページ、2008  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/newcs/gengo/1300857.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/gengo/1300857.htm) (アクセス:FEB, 2, 2014)

- 2) 中央教育審議会答申：言語活動の充実について、文部科学省ホームページ，2008  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/dokusho/meeting/080612/006.pdf#search](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/080612/006.pdf#search)  
(アクセス：FEB, 2, 2014)  
(指導教員 森 勇示)